

午後三時

一幕

池谷信三郎

人物

荒川五郎 捕鯨船の砲手

村田滝蔵 船長

高野朔郎 水夫長

ふゆ 五郎の娘

進 盲目なる五郎の子

其他水夫等出づ。

場所

北国の海辺の街。

時代

現今。

晩冬。曇りたる日の午後。

日本海に臨める港街の尽頭、波止場に近く立てる旅館の階下の室。船は概ね露領と交通するものなれば、外国人の出入多く、この室の体裁も半は洋風なり。

下手横に玄関あり、入ると直ちに階子段あり二階へ通ず。また階子段の裏に出入口ありて奥の室へ通ず。真白き壁に帽子懸などあり。床の上に大いなる落葉松の鉢を置く。中央より稍下手に寄りて、真白き壁ありて左右に隔つ。入口の扉あり。

上手の一室。正面に大なる窓二個、硝子越しに、鉛の如く重く沈みたる海の色見ゆ。室の中央に、他の物とは不調和なる程莊嚴に見ゆる、大卓子一個横はる。青く塗りて、鳥または獣を彫刻せり。粗造の椅子五個これを囲む。窓の傍に白を布を覆へる寝台あり。上手斜めに真白き壁、大なる窓一個、海に向ひて開く。

大卓子より稍上手に円形の暖炉ありて、火熾んに燃ゆ。その傍に石炭の箱無造作に置かれたり。壁に懸けたる額の数七個。みな海の絵なり。

海鳥の悲鳴。浪の音。

(船長村田滝蔵、四十五歳、赭顔にして黒き髭あり。茶色の背広、椅子に凭りて新聞を読みみる。快活なる動作、折々唄を歌ひつつ足拍子を取るが癖。声太きは海に住む子の習慣ならひなるべし。)

水夫長高野朔郎、二十七歳、逞ましき骨格に黒き背広の服を纏ふ。稍沈鬱なる顔付。同じく卓子を繞りて椅子に凭る)

水夫長 ああまだ中々暖かくなりさうも無いなあ。この寒さは実に堪らんたま。

船長 併し今年はまだ好いよ。去年の冬と来ちやあ酷ひどかつたからなあ。

水夫長 ええ、随分北極に近い島でしたからな。

船長 あの島の雪は青白く光つてゐたぜ。さうして暴風あらしの晩などは、舷燈の辺に鳥の死骸が一面ぢや。

水夫長 思ひ出しても顛へますよ。実に寒かつた。鳥ばかりぢや無い、人間も死にさうでした。

船長 如何どうだい。もう密猟こりこりは懲々こりこりだらう。

水夫長 なあに又遣りますよ。(暖炉を顧みる) おや、何時の間にか消え懸つて来た。

船長 盛んに燃やせよ。去年の分まで暖まるんだ。

水夫長 吝嗇しみつたれな宿屋だなあ。こればかりの石炭ぢやあ、仕方がありやあしない。(暖炉のなかに石

炭を投げ込む)

船長 (窓より海の方を眺む)やあ、天氣が大分怪だいぶしくなつて来たぞ。又雪でも降るんだらう。

水夫長 (同じく海を眺む)燈台の傍の信号標に、赤球が上りましたぜ。

船長 どれどれ、うむ、先刻さつきは見えなかつたが。

(間)今夜暴れるぞ。

水夫長 何だか常いつもとは違つた暴風のやうに思はれますな。あの赤球も厭な色をしてゐやがらあ。

船長 何しろ心持の悪い日だ。酒でも飲まうぢやないか。

水夫長 飲みませう。

(水夫長階子段の裏の口より去る。船長黙然として海を眺む。

寂寞。

ややありて水夫長酒の壘は乾豚むの皿など持ちて出づ)

水夫長 船長。何も有りませんよ。乾豚ばかりだ。

船長 何でも好いさ。酒さへありやあ沢山だ。(酒杯に酒を注ぐ) 五郎はまだ寝とるのか。

水夫長 ええ。昨夜三時頃迄蠟燭を点けて、何か遭つて居ましたが、今日は飯も食はずに眠つてゐます。

船長 何をしてゐたんだい、昨夜遅くまで。

水夫長 娘の許へ遣る手紙を書いてゐた様子でしたよ。

船長 左様か。今に起きて来るだらう。(二三杯続け様に酒を飲む)

水夫長 (手の酒杯も忘れて外を眺む) 何処の港でも厭なものだが、此処の赤球の色は実に堪りませんな。まるで血のやうだ。

船長 それはさうと、己達の船は彼処で好いかな。

水夫長 大丈夫。請合ひますよ。どんな大暴風が来たつて平気でさあ。

船長 併し今夜は余程猛烈に吹くらしいぜ。

水夫長 五郎が乗つてゐりや安心ですがね。

船長 五郎を遣るのは可哀相ぢや。(間) だがよく寝る奴だなあ。(衣兜より大形の銀時計を出す) 最早二時過ぎとるのに、如何したのだらう。身体でも悪いのぢやないかね。

水夫長 左様ぢや無いでせう。昨夜遅くまで起きてゐたので疲れたのですよ。

船長 うむ、左様だらう。(大卓子の端に置きたる一封の手紙に目を注ぐ) おい、これは何時来たのだい。

水夫長 何です。五郎へ来た手紙ですな。(手紙を手に取りて見る)何だ、触さはつたら冷たかつたぜ。

(間) 一体何時来たんでせうな。

船長 変だな。此処に置いてあるのを少しも知らなかった。急な用事かも知れんから五郎を起して来ると好い。

水夫長 左様ですな。

(水夫長階子段を昇りて二階にゆく。

灰色の鳥一羽、窓の近くを飛ぶ)

船長 おや、妙な鳥が飛んでゐるぜ。何て鳥だらう。見た事の無い鳥だな。(窓を開きて鳥を追

ふ)

中々遁げぬわい。

(鳥飛び去る。

階上より荒川五郎、五十八歳、大なる骨組、色褪せたる鼠色の背広を着、同じ色の洋袴すぼんを穿つ。頭髮殆んど白く、口髭銀の如くに美し。沈みたる顔色、海風に晒されて黒くなりたる上に、稍蒼味を帯びたり。額の皺深く、眼の光鋭し、默然として人を凝視するが癖なり。

衣兜に両手を入れて降り来る。

水夫長はやや後れて出づ)

水夫長 (階子段の半にて) 今日是一日寝てみましたな。

五郎 (慵ものうげに頭を振る) いいえ。寝やしません。中々寝られやしません。

(階下に来る)

船長 如何どうした、五郎。よく眠るぢやないか。(手紙を取上げて五郎の前に差出す) こんな手紙が来てゐるぜ。

(五郎黙然として手紙を見る)

船長 何時来たのか、少しも知らぬ間に、此処に置いてあつたのだ。

(五郎手紙を凝視して戦慄す)

五郎 (微かに) 私に手紙ですか。何処から来たのかな。(手紙を受取りて其儘衣兜のなかに入る) やあ、酒があるな。一杯頂戴しよう。眠気覚しぢや。(椅子に凭る)

(暖炉の火消えんとす。水夫長石炭を投げ入る)

船長 如何したんだ。酷く疲れてゐるやうだな。

五郎 (微笑) いいえ。もうすっかり疲労も取れました。何せい、昨夜は遅くまで眠られませんか。娘の許へ手紙を書いて黎明前まで起きてゐました。

船長 併し折角楽しみにして来たのに、家が焼けて了つてゐたので落胆したらう。

五郎 なあに家位何でもありません。私は親も無ければ妻も無い男だから、私には船が家で、海が妻ぢや。(急に悲しげに) なあに家位何でもありません。

船長 それも左様だな。

(此時灰色の服に半外套を纏ひたる水夫一人忙しげに入り来る)

水夫 船長。如何も彼処に碇泊してゐては危いさうです。燈台から注意をしまりました。

船長 (暫時考へたる後水夫長に) 君一寸往つて呉れんか。もう少し奥へ入れるだけだ。なあ

に燈台の看守の奴狼狽やつまごついてゐやがるんだよ。

水夫長 よろしい。一寸往つて来ませう。

(水夫長立上る)

五郎 君一寸待つて呉れ。船へ行つたらな、私の机の抽斗ひきだしから短銃びすとるを待つて来て下さらんか。
船長 短銃を如何どうするんだ。

五郎 あんまり海へばかり出てをつたので錆びましたから、磨かせやうと思つてゐるのです。
(水夫長に) ぢやあ頼むよ。

(水夫長水夫と共に去る)

五郎 (外の方を眺む) 成程、大分怪しい空模様ぢや。何だか人を押し付けおるやうな雲ですな。
船長 実に厭な雲の色だね。それに五郎、あの赤球を見ろ。鉛色の空から赤い血が一滴垂れたやうだぜ。

五郎 左様ですな。何だか気味が悪い。妙な寒さだと思つたら、何だか降つて来さうですな。
(嘲る如く笑ふ) 暴あれるならいくらでも暴れるが好いわ。

船長 暴風の前は心持の悪いものだね。

五郎 なあに好い心持でさあ。(寝台の方へゆき腰を懸けて衣兜より手紙を出す) 船長。今夜久しぶりで騒ぎませうか。

船長 中々元気ぢやねえ。

五郎 (封を切る) 函館ぢやあ愉快でしたなあ。(眼を手紙の文字に走らせつつ) 今夜又あんな騒をやりませうよ。(暫時沈黙) 馬鹿な事を書いてゐるわ。

船長 何だ。

五郎 (立上りて椅子の所へ来る) 何ですかなあ。まあ云ひますまいよ。(衣兜より時計を出す) 二時少し過ぎか。

船長 今日殆んど一日寝とつたね。

五郎 まだ眠つてから眼を覚ます事が出来れば好いです。だがね船長、今日騒ぐのは止めませうよ。別段秘密ぢやない。これを御覧なさい。(手紙の一部を示す) 午後三時にお迎ひに上るべく候と書いてあるでせう。私は此手紙を出した者に会はなくてはならん。では止よさうよ。

五郎 (安からぬ有様にて彼方此方に歩む) 午後三時。午後三時。

(外には雲の音が微かに聴ゆ)

船長 寒い、寒い。おや、暖炉の火も消え懸つて来た。(石炭を無造作に抛り込む)

五郎 (猶歩みつつ) 黒い帆を張つた船で来るのか。馬鹿な奴だ。

船長 中々燃え付きさうも無いな。

五郎 午後三時。最早直きぢや。午後三時にお迎ひに上るべく候。(猶彼方此方に歩む)

船長 うん。やつと燃え付いた。

五郎 ふうん。矢張り黒い帆の船で来るのか。七日も続けて黒い帆を張つた船の夢を見たから、

大抵この位の事だらうと思つてゐた。

船長 何だ。何を云つてゐるのだ(外の方を見る) おや、雲が降り出したね。

五郎 (椅子に戻る) ああ、到頭降り出して来ましたな。

船長 如何したんだ。大分顔色が悪くなつたぜ。

五郎 左様ですか。(頭を振る) 本当の私はあなたには分らん。唯一人この手紙を送つた者が知つて居るばかりだ。

船長 本当の貴様だと。(間) 何だか謎のやうでよく分らんねえ。

五郎 分らんで好いのです。分つたらあなたは驚くよ。(声を低く) 私はね、船長。海の中から生れた男なんですよ。私には本当の父も母も無い。(海の方を指さす) 彼処が私の産屋ぢや。(間) さうして彼処が私の墓場ぢや。今迄幾度も海へ帰らうと思つた。

船長 海へ帰らうと思つたのか。

五郎 左様です。左様です。今なら喜んで帰りますが、今迄は少し躊躇した。(戦慄す) 船長、私は七日続けて夢を見ましたよ。昨日の晩も見ました。一昨日の晩も見ました。其前の晩も、其前の晩も、丁度七日続けて同じ夢を見ました。

船長 どんな夢だ。

五郎 怖しい夢です。実に怖しい夢です。併し此怖しさはあなたには分らない。(急に高く笑ふ) 捕鯨船の砲手で荒川五郎と云へば、かなり売れた名前だが、もう老い込んできましたよ。

船長 いや。まだ中々壮んだよ。

五郎 もう駄目です。昨日鏡に向つて、つくづく自分の顔を眺めました。此皺の寄つた事は如何です。凝つと見てみると、まだ微かに残つて居る額際の傷痕から、新たに血が流れ出すやうな気がして、竦つとして鏡を抛り出しました。貴方も覚えてゐませう。もう十六七年前に私が決闘した事を。あの時の傷です。

船長 うん。左様だつたね。よく覚えてゐるよ。相手は何とか云つたな、彼奴は二三日してから死んで了つたつけ。

五郎 可哀相な事をしましたよ。(黙考す) 併し彼奴も幸福だ。

(五郎の娘ふゆ、二十一歳。粗末なる着物、古き肩掛を纏ふ。色白く、肉豊かなれども、額の辺何となく悲しげなり。常に稍俯向きて面を上げず。弟進、十一歳。年より幼く見ゆ。鼻高く、眉黒き子、両眼盲ひたり。二人玄関に来る)

娘 御免なさいまし。

船長 誰か来たやうだぜ。

五郎 (起上りて玄関の方へ来る) やあ来たか。さあ入れ^{はい}。

(ふゆ、進、此方の室に来る)

娘 もつと早くと思つて居たのですが、つい遅くなりました。

五郎 なあに遅い事は無いわ。(時計を見る) まだ三時までには三十分ある。

進 (突然) お父様。今日は寒いねえ。

五郎 寒いか。この位の寒さに弱つちや駄目だぞ。(手を取りて暖炉に近き椅子に懸さす) もう直きに暖かになるわ。

娘 (五郎の顔を凝視す) お父様。何だか顔色がお悪いやうですねえ。
五郎 そんな事はありません。

娘　いいえ。何時もより蒼ざめて、眼が潤んでおいでですわ。

五郎　左様かな。大方寒さのせみだらう。何も心配する事は無い。(沈みたる調子)ふゆ。併し己は今お前の顔を見て変な心持がしたよ。

娘　どんなお心持なんです。

五郎　いや云ふまい。口では云ふ事の出来ない怖い心持ぢや。

娘　変だわねえ。お父様、本当にあなたのお顔色がお悪いやうですよ。何だか顫へていらつしやるぢやありませんか。

五郎　(頭を振る)いや何でも無い。(間)それはさうと、お前はよく己の手紙を読んだらうな。

娘　はあ。よく読みました。

五郎　左様か。書いた事はすつかり分つたらうな。

娘　はあ。よく分りました。

五郎　進。お前も子供だが分つたらう。

進　ええ。僕はよく分つてゐます。

五郎　左様だらう、左様だらう。(急に神経的に)　ふゆ。お前にはまだ分らんな。

娘　分つてをりますよ。ですからそのお話は。

船長　五郎。久しぶりで会つたんだ。何か面白い話でもしろよ。

五郎　左様ですな。

進 僕は帰りたいたい。姉さん、帰りませう。

五郎 何んだ。何故帰るのだ。

進 何故でも。

娘 如何したんです。

船長 何んだ。今に面白い事をして遊ぶから、そんなに帰りたがらなくても好いぢやないか。

五郎 (悲しげに進を見る) 待つとれ。待つとれ。まだ早い。

進 だつて僕は何だか怖い。

五郎 (愕然として) 何だ怖いと云ふのか。そんな事があるものか。

娘 もつとゐたつて好いでせう。

進 帰りたいたいなあ。

五郎 進。それに今夜は暴風だぜ。(外を眺む) うん、雲は最早止んで了つたやうだ。

船長 止んだかね。併しあの雲の模様ぢやあ、もう直き暴風がやつて来るね。

娘 気味の悪い空ですこと。おや、赤い球が上つてをりますね。

五郎 うん。暴風の報知しらせぢや。

娘 では愈今夜暴風が来るのですかねえ。

船長 なあに。一晚暴れりやあ後は好い天気になりませあ。

娘 併し怖いわねえ。

五郎

(聞答む) 何だ。怖い。

進

(突然) 姉さん、やつぱり帰らうよ。

娘

何故そんな事を云ふの。今帰つて途中で暴風に会つたら大変ぢやありませんか。

進

好いから帰らうよ。

五郎

進。お前は己が怖いのだらう。このお父様が怖いのだらう。

進

(答へずして姉に) 帰らうよ。

五郎

(苦しげなる顔付) 如何だ。左線だらう。お父様が怖いのだらう。

娘

お父様。今日は如何なすつたんです。そんなにおつしやると進が泣きますよ。

進

早く帰らうよ。姉さん。

娘

如何してそんなに帰りがるの。もう一時間待っていていらつしやいね。

進

きつと一時間経つたら帰るね。

娘

ええ。きつと帰るわ。

船長

大変帰りがつてゐるな。如何したんだい。

五郎

(投げるが如く) 如何したんですか。

(遠く海上より汽笛の響聴え来る)

五郎 今頃船が入つて来たのかな。

船長 空模様が怪しいので、遁げ込んで来たのだらう。(窓より海の方を眺む) 己たちの船も奥の方へ入れたらうな。

五郎 此処から見えますか。

船長 いや。見えん、見えん。二階からは見えるだらう。

五郎 見えます。燈台が丁度真正面ぢや。

船長 左様か。それでは一寸見て来よう。

(船長階子段を昇りて二階にゆく。

汽笛の響二度幽かに聴え来る。暫時沈黙。浪の音。海鳥の悲鳴)

五郎 ふゆ。お前は俺の手紙に書いてあつた事がよく分つてゐると云うたな。

娘 分つてをりますよ。此処にお手紙を持つてをります。(帯の間より手紙を出す)

五郎 よし。一寸お見せ。(手紙を受取り厳かなる顔付にて読む) 黒き帆の船が見える筈なれば其船に乗りて二度海ふたたびに帰るべく候。(娘に) 此文句が分つたか。

娘 今迄の船をお止めになつて、別の船にお乗りになるのでせう。

五郎 (二度読む) これ或は永久の離別なるやも知れず候。此文句も分るまい。

娘 分つてをりますよ。

五郎 分るものか。(二度) 分るものか。

娘 お父様。今日は如何なすつたのです。

五郎 如何もしやせんよ。怖ろしき夢に候。実に怖ろしき夢に候。併も七日の間続けて見申し候。これもお前には分るまい。

娘 お父様。もう。

五郎 (猶手紙を読み続く) 書き終りし時、蠟燭は流れ尽して、何となく悲しく思はれ候。ふゆ、分るか。

娘 分つてをりますよ。

五郎 嘘を云ふな。此恐怖おそれと苦痛くるしみとは己の外は誰にも分らんのだや。(間) ええ。こんな手紙は焼いて了へ。(手紙を暖炉のなかに投げ入る)

進 お父様、如何したんです。

五郎 黙つとれ。姉さんに分らん事がお前に分るか。

進 何です。姉さんが泣いてゐるぢやありませんか。

五郎 棄ほつとけ、棄ほつとけ。(不安の様にて椅子を離れて彼方此方に歩む) 午後三時。午後三時。お父様、最早三時ですか。

五郎 (驚愕) いや、まだぢや。併しもう直きだよ。

進 (急に思ひ出したる如く) 姉さん帰らう。

娘 まだ一時間経ちやしませんよ。もう少しお待ちよ。

五郎 待つて居ろ。進。

進 僕は何だか怖いんです。誰だか冷たい手が触るやうですもの。

五郎 (立留る) 進。何だ。

進 頸の所へ冷たい手が触るんです。

五郎 冷たい手が。

進 窓が開いてるやしないのですか。

娘 開いてるやしませんかね。

五郎 (冷かに) 何処か戸の隙間から風が来るのだらう。

進 左様かなあ。

五郎 左様だよ、きつと。(わざと高く笑ふ) 進。何だかつまらなさうだな。お父様が面白い話を聞かせやうか。御伽噺ぢや。(進の傍の椅子に腰を下す)

進 どんな話。面白いんですか。

五郎 うん。面白い話だ。往昔北の海の遠くの方に死の島といふ島があつたのぢや。

進 今は無いの。

五郎 黙つて聞くんだ。其死の島と云ふ所には、夜ばかりで昼が無い。冬ばかりで春も夏も秋

進

も無い。唯青い色の島が、星の薄明りでぼんやり見える。蝙蝠見たやうな鳥と栗鼠^{リス}見たやうな獣が栖んでゐるばかりで、外には何の鳥も獣も栖んでゐない。影のやうな人間が、多くの洞穴^{ほらあな}に栖んでゐるが、いつも黙つてゐて口をきかぬ。それはそれは怖い所ぢや。そんな所本当にあるかなあ。

五郎

うん、本当にあるんだ。さうして此島には風が無く雨も無い。いつも夜なので暗黒^{くらやみ}だけれど、星の光で如何やら薄明りが差してゐる。又この島の近くの海の色はまるで鉛ぢや。重く沈んで流れないから潮の音なんぞは少しも無い。この島の寒さと云つたら、鉄でも裂けて了ふやうな有様ぢや。(娘に) お前も聞いてゐる。進にばかり聞かすのぢやあ無いのだ。

娘

はあ。聞いてゐますよ。

五郎

(稍戦慄しつつ) 怖い、怖い、極めて怖い所ぢや。其島にも王様があつて矢張り洞穴の宮殿に住まつてゐる。時々唯一人洞穴を出て浜辺の方へ歩いてゆく。時にはきつと遠くの遠くの海の果から、不意に湧出したやうに、黒い帆が現はれて次第に死の島に近寄つて来る。王様は微笑してその船を待つてゐる。さうして船が島に着くと、影のやうな人間が群がつて下りて来る。黒い帆の船は又何処かへ出てゆく。王様は後をも顧みず、洞穴の宮殿に帰つてゆく。影のやうな人間は何処へか散つて了ふ。すべて無言ぢや。すべて寂寞ぢや。こんな事が一日に幾度となく繰返される。

進 厭な所だなあ。お父様行つた事があるの。

五郎 己は行つた事は無い。併しもう直きに行くだらう。

進 そんな所行かない方が好いや。

五郎 左様かな。(間)或日の事だったが、此黒い帆の船が入つて来た時、下りて来た一人が小さな紙片を王様に渡した。王様が開いて見ると、此島に三滴の血汐が落ちてゐるから、其落ちてゐる所を知つてゐる者に位を譲れと書いてある。王様は暫く考へた後、黙つて洞穴に歸つてゆく。

進 何だかよく分らない。

五郎 黙つて聞いてゐる。二三日経つと黒い帆の船が一人の勇士を乗せて来た。鉄の兜を冠つて、鉄の甲よろひを着て、岩見たやうな大男ぢや。船から下りると突然高く笑つた。絶壁にその響が訝して、星の光が真青になつた。怖らく此島に声を発する者が来たのは、此男が初めだらう。王様は驚いた。死の島の人は皆驚いた。

進 何です、其男は。

五郎 何だかな、己にも分らん。さうして其男は王様に向つて云つた。おい、己は運命の国から遣つて来たのだ。此間の手紙に書いたやうに、三滴の血汐のある所を知つてゐる者に位を譲るだらうな。併し王様は頭を振つた。其男はまた高く笑つて、そんな事を云つたつて駄目だ。己はよく知つてゐると云つて先に立つて歩き出した。王様は後から附ついてゆ

く。

進
えらい男だな。

五郎

谷を越えると泉があつた。泉の傍へ来ると其男は立留つて、此処に一滴あると云つて王様を顧みる。荆棘ばらのやうな木に、唯一輪白い花が咲いてゐる。其花片はなびらに血が一滴赤く見える。王様はうなづいた。又男は歩き出したが、山を越えると瀑があつた。其傍で立留つて、此処に一滴あると指さした。白い陶器すゑものの破片かけが散つてゐる。其上に血が一滴赤く見える。男は王様かまに閑かまはずに歩いてゆく。海に臨んだ断崖の上に出た。北海の風は実に寒い。青い石が転ころがつてゐる。其傍で男は王様の来るのを待った。さうして喘ぎながら来る王を冷やかに眺めて、此処に一滴と云ふ。指さした石の上に一点血の赤い色が見える。

娘
何だか気味の悪いお話ですなえ。

五郎

それから王様は位をこの男に譲つた。この男は喜んで、それでは運命の国へ帰つて、堂々とやつて来ると云つて、死の島を去つた。去り際にまた勢よく高く笑つた。さうして悠然と黒い帆の船に乗り込んだ、併し其男は二三日してから来ることは来たが、今度は既に影のやうな人間だつた。黙つて船から下りて、何処かへ行つて了つたさうだ。白髪はなの王様は矢張り元の通り黙つて黒い帆の船を迎へ、黙つて黒い帆の船を送つてゐる。千年も万年も王様のする事は変らない。黒い帆の船は絶えず影のやうな人間を運んでゐる。

(間) これで己の話は終ぢや。しまひ

進 何だかよく分らないや。

五郎 何だ。分らんか。(娘に) おい、ふゆ。お前には分つたらう。

娘 はあ。

五郎 (悲しげに) こんな夢を毎晩見るのぢや。毎晩毎晩うな魔されて、其苦痛くるしみは口では云はれん。其故ですか大變お瘦せになりましたね。もうそんな厭な事を考へるのはお止めなさいましな。

五郎 考へまいとしても考へるのだから仕方が無いわ。

娘 如何してでせうねえ。

五郎 (苦しげに) 如何してかなあ。

進 (突然首を上ぐ) お父様、海つてどんなもの。

五郎 海か。海は広い真青まっさおなものぢや。そら、お前にも聴えるだらう、直ぐ其処で打つてゐる浪の音が。

進 ええ。聴えます。あれが浪の音だとは知つてゐますよ。

五郎 さうして海は風の無い時は極めて静かだが、暴風でも吹くと極めて凄じい有様ぢや。

進 だが青つてどんな色。

五郎 空、海、草、木、皆青い色ぢや。(前の卓子を指さす) これも青い。

進 何です。何です。

五郎 ああ、お前には見えんなあ。

(沈黙。娘は椅子に凭れる儘沈思す。浪の音次第に高くなる)

進 お父様、では太陽つてどんなもの。

五郎 太陽は大きな火の塊かたまりぢや。

進 怖いものですねえ。

五郎 怖いが慕かしいものだな。

進 僕が去年の夏、姉さんと一緒に海岸に行った時、如何してこんなに温いのと聞いたたら、太陽に照されてゐるからだと教へられました。其時太陽の光が身体に当つてゐる心持は、何だか誰かに抱だかれてゐるやうでしたよ。

五郎 左様だらう。左様だらう。

進 お父様。だがまだ分らない事が沢山あるんです。

五郎 左様か、分らん事があつたら、お父様なり姉さんなりに聞けば好いぢやないか。

(進俯向きたる儘嘘啼を始む。娘は猶沈思して面を挙げず)

五郎 泣くな。泣くな。男がそんな事ぢや仕方が無いぞ。(娘に) ふゆ、如何かしたのか。
娘 いいえ。如何も致しません。

進 (嘘啼を止む) お父様。赤つて如何な色ですか。

五郎 赤か。赤は喜ばしい色ぢや。この吸炉の火も赤ければ、この身体からだの中の血も赤い。

進 先刻さつき姉さんが赤球が上つて居ると云ひましたが、何です。

五郎 (窓の外を眺む) うん。赤球は暴風の報知しらせだよ。

進 厭だなあ。ぢやあ暴風が来るんですね。

五郎 今夜は暴風ぢや。(海の方を眺めつつ) 併し何も見えないでお前は幸福だ。あの赤球の薄
気味の悪い事と云つたら何とも云へんからねえ。

進 左様ですか。

(暫時沈黙)

五郎 (莊嚴なる調子) お前は黒つて色を知つてゐるだらうな。

進 ああ黒ですか。黒ならよく知つて居ます。誰よりもよく知つてゐるんです。(悲しげに)
お父様。僕の見る事が出来る色は黒ばかりなんです。

娘 (首を上ぐ) 進。もうそんな事を云つてはいけませんよ。

進 だつて僕は何処を向いても黒い色ばかりなんです。(二度嘘啼を始む)

五郎 おや、又泣いてゐるな。

(浪の音。海鳥の悲鳴。窓を打つ風の音次第に高くなる。五郎眼を閉ぢて黙然と椅子に凭る)

進 姉さん、まだ帰らないの。もう帰らうよ。

娘 まだ三時にはならないでせう。三時になったら帰りませう。

進 早く三時にならないかなあ。

五郎 (驚愕) 何だ。もう三時か。(時計を見る) ああ直きに三時ぢや。午後三時。ああ愈午後三時ぢや。

娘 (聞答む) 何です。

五郎 何でも無い。もう直きに午後三時ぢや(進に)おい、泣くな、泣くな。泣いたつて仕方が無いぞ。海が見えんでも好いぢやないか。空が見えんでも好いぢやないか。併しお前も午後三時を待つてゐるんだな。(間) 帰れ。帰れ。早くお前の家へ帰れ。

進 (面を上ぐ) もう帰つても好いのですか。

五郎 (烈しき調子) 帰れ。帰れ。早く帰った方がお前の幸福ぢや。

進 さあ姉さん、帰りませう。

五郎 (更に烈しき調子) 馬鹿め。何処へ帰るんだ。何処へ行つても目は開かんよ。何処へ行つても真暗だよ。さあ帰れ。姉さんと帰るんぢや無い、己と帰るんだ。

娘 お父様。

五郎 何ぢや。

娘 如何して今日はそんな事ばかりおつしやるんです。

五郎 (娘の顔を凝視す) ああ、お前は目が開いてゐるから分らん。

進 (突然怯^{おび}ゆる如く) あつ、冷たい手が又触りますよ。

娘 誰もゐやしないがねえ。

進 誰もゐないのですか。併しそれはそれは冷たい手なんですよ。

(水夫長忙しげに入り来る。五郎知らずして黙然と考へてゐる)

水夫長 おや。船長はゐませんね。何処へ往きました。

五郎 (首を擡ぐ) ああ船長は二階へ行つた。如何した、奥へ入れたかい。

水夫長 入れた事は入れたが、もう暴風は大丈夫らしい。

五郎 (外を眺む) まだ危いやうぢや。短銃は持つて来て呉れたかね。

水夫長 持つて来ましたよ。

(水夫長衣兜より短銃を出して五郎に渡す)

水夫長 船長は寝てゐるのかな。起して来よう。

五郎 うん。己が今二階へ行くから呼んで来て遣らう。ふゆ、二階へ行かうぢやないか。

(五郎は進を抱きて階子段を上る。ふゆ後より続き二階へゆく。水夫長椅子に腰を懸けて酒を飲む)

水夫長 (暖炉を見る) や、又火が消え懸つてゐる。厄介だな。石炭も無いや。

(水夫長階子段の裏の口へ入る。船長眠気なる眼を擦りつつ二階より下り来る。水夫長石炭を持ちて出づ)

水夫長 (笑ひつつ) 大分眠むさうですな。

船長 眠い。眠い。実に眠い。船は故障も無かつたらうな。

水夫長 ええ。無事です。(石炭を燃す)この寒空に火無しぢやあ堪りませんな。

船長 何だ。又消えたのか。

水夫長 船長、今日は何だか得態えたいの知れない鳥が海の上を飛んでゐますぜ。

船長 ふうむ。どんな鳥だい。

水夫長 いや薄気味の悪い鳥ですよ。全身灰色で嘴ばかり真白なんです。まあ信天翁あはうどり見たやうな鳥ですな。

船長 何て鳥だらう。

水夫長 共鳴声つたらありませんぜ。私が艙口から甲板へ何の気なしに出て来たら、突然頭の上で鳴きやがつたんです。驚いて見上げると、帆桁の上にはずらりと十羽ばかり並んでゐるぢやありませんか。癢に触つたから帆綱きれの片を抛り付けてやつたんです。それでも中々遁げないで、大きな嘴を開けて、ぎやあぎやあ鳴いてゐやがる。

船長 (眉を顰む)妙な鳥だな。それから如何した。逐おつぱら払つたかい。

水夫長 いえ。其儘ほ棄つとききました。(暖炉を眺む)や、又消え初めた。如何したんだらうな。

(浪の音烈しく窓にひびく。風漸く吹き増りゆきて、遠く戸の揺めく音など聴ゆ)

水夫長 大分烈しくなつて来たな。(思ひ出したる如く) ああ、船長。先刻九人ばかり水夫に上陸を許しましたぜ。

船長 うん。よし、よし。

(此時突然二階にて短銃の音聴ゆ。二人一斉に椅子より起ちて顔を見合はす)

船長 五郎だな。

(二度短銃の音。二人戸口の方へ走りゆく時、娘は階子段を転ぶが如く降り来る。後を追うて五郎の姿現はる。短銃を握る手顫へ、顔蒼し。ふゆは戸口にて倒る)

五郎 (喘ぎつつ) 遁げるな、遁げるな。卑怯な奴だ。

(五郎階子段を降り来る。ふゆを撃たんとす)

船長 何だ、五郎。

(五郎船長を見て冷かに笑ふ。船長進みて短銃の前に立つ。水夫長はふゆを抱き起して室内に連れゆく)

五郎　あなたには分らん。留めてはいけません。

船長　馬鹿を云ふな、気を静めろ。

(五郎の手より短銃を奪ふ)

船長　(短銃を衣兜に収めつつ) 馬鹿な事をするな。

(五郎慄へながら厳かに室内に入り来る。浪の音、風の音烈し。窓の硝子破れんとす。海鳥の悲鳴聴ゆ)

娘　お父様、お父様。

(五郎黙然として答へず。船長水夫長無言の儘立つ)

娘 お父様。何故進を殺したんです。何故あんな酷い事をなすつたのです。

(五郎猶答へず。眼を遠く海のあなたに注ぐ)

娘 進は何の悪い事をしました。

五郎 (強き声にて) 可哀相だから殺したんぢや。

娘 可哀相なら殺さないが好い。あんな眼の見えない子を。

五郎 (更に強き声にて) 盲目だから殺したんぢや。(船長に) 船長、先刻の話を覚えておいで
ですか。

船長 うむ覚えとる。

五郎 (時計を見る) ああ午後三時は最早瞬く間ぢや。(身を顫はす) ああ午後三時。(間) 船
長、海へ帰る時は来ましたよ。お迎ひに上るべく候と書いてありましたな。

船長 (五郎に近寄る) 誰だ。迎ひに来るのは誰だ。

五郎 誰でもない。唯怖しいものです。愈海に帰るのぢや。七日も続けて見た夢のなかに帰る
のぢや。(倒るる如く椅子に凭る)

娘 お父様、お父様。

五郎 (海のあなたを凝視す) まだ見えん。まだ見えん。

(風の音。海鳥の悲鳴)

船長 何が見えないのだ。

五郎 いや私一人に見えるもので、あなたには見えません。

娘 お父様、進を生かして下さい。

五郎 (娘の顔を凝視す) 進は死んでゐた子なんぢや。生かすも何もあるものか。

娘 お父様。

(海風凄じく屋を撼かす。空暗し)

五郎 まだ見えん。おう。暗い。暗い。何だか急に暗くなつて来たやうぢや。

船長 五郎。あの鳥を見い。妙な鳥だ。

五郎 (戦慄す) ああ、あの鳥です。あの鳥です。夢のなかで見たのはあの鳥です。色の翼を持つた白い嘴のあの鳥です。

(海鳥の悲鳴。浪の音)

五郎 ああ、あの鳥の鳴声が聴えますか。船長。（耳を傾く）ああ、あの怖しい声。あの声を聞いて顫へずにゐられますか。

船長 怖しい声だな。

娘 お父様。進を。進を。

五郎 （驚愕の眼を見張る）見える。見える。真黒な帆ぢや。怖しい程黒い帆ぢや。

水夫長 何です。

五郎 何でもない。私より外の人々は見えんのだや。（狂へる如く）おう。走つて来る。だんだん近くなつて来る。遅いやうぢやが早い。見る見る近くなつて来るわ。

水夫長 何です。何です。

五郎 君にや分らん。（間）走る。走る。もう余程近くなつて来た。

娘 進を。進を。進を生かして下さい。

（烈風猛然として窓を打つ。浪の音。海鳥の悲鳴）

五郎 やあ。もう港の口に来た。帆の数も九つぢや。九枚の帆、九枚の帆。夢のなかで見たのはあの船ぢや。（急に悲しげに）進は黒い色は誰よりもよく知つてゐると云つた。進は生れ

た時からあの黒い帆を知つてゐたのぢや。併し己は初めて見るのぢや。

船長 何処に見えるのだ。

五郎 (猶海のあなたを凝視す) あなたには見えん。併しいづれ見える時が来るだらう。

娘 お父様。お父様。

(風の音。浪の音)

五郎 おう。黒い帆が空を半分隠したわ。早い。早い。もう港に入って来た。

船長 五郎。

五郎 (椅子より起上る) ああ、帆の唸るのが聴える。船長。あなたにはあの凄まじい響が聴えませんか。

(風の音烈し)

五郎 (顫へつつ) 其処まで来た。其処まで来た。(娘に) ふゆ。見ろ。見ろ。見えなくつても眼を開けてよく見ろ。進を殺したのはあれぢや。己ぢやあ無いのだ。

(娘答へず)

五郎 ああ、帆が一杯風を孕んでゐる。如何ぢや、あの壮んな有様を見い。

(突然風の音はたと絶ゆ)

(大寂寞。人みな動かずして死せるが如し)

五郎 あつ。黒い帆の船が其処に来た。三時ぢや、三時ぢや、午後三時ぢや。

(五郎二三歩窓際の方へ進み、よろめ蹠躑きて倒る)

船長 五郎。(五郎の口に手を当つ) ああ、もう呼吸が無い。(時計を出して見る) 丁度午後三時ぢや。

(此時表の方より九人の水夫入り来る。無言の儘首を垂れて並び立つ)

娘 (窓より外を眺む) ああ。赤球が下りました。

（船長、水夫長、五郎の屍体を青き大卓子の上に置く。灰色の鳥一羽悲鳴しつつ窓の外を飛ぶ。大寂寞）

幕

底本 吉井勇全集 第五卷

著者 木俣修 編集並に解説

出版者 番町書房

出版年月日 昭和38